

0 理念

2005年度以降に設定した目標

留学生対象の日本語について、必修科目の補完として選択科目の「日本語」を開設する。

進捗状況報告

(2)の4については、次のとおり。
・2006年度から中国語常勤講師1名を増員し、現在、4名体制となっている。
・中国語のクラス数は2005年度37から2007年度39に増加し、希望充足率は71%から77%に改善されている。
・2006年度から選択必修のスペイン語(上ヶ原キャンパス)を開設した。
・2005年度から留学生対象の日本語(上ヶ原キャンパス)を開設した。
(2)の5については、実施済み。
(2)の新たな目標については、選択科目としての「日本語(読む・書く)」「日本語(話す・聞く)」を2008年度から開設する。

学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

本センターが目標とすることは、「国際人として活躍できる言語運用能力ならびに外国語文化理解に優れた人材を育成すること」であるが、それが具体的にどの程度達成されたかを検証することは難しいところである。しかしながら、英語のみに関して、またごく一部の学生の履修者に限った内容となるが、センターで開講している英語インテンシブ・プログラムと「英語コミュニケーション文化」副専攻(MDS)の履修者の状況からその点を検証してみたい。まず英語インテンシブ・プログラム(IEP)は、インターミディエイト・コース、アドバンスト・コース、飛び級コース、英語中期留学等で一定の単位数を取得し、TOEFL550点以上に達した優秀な学生にIEP Diploma(修了証)を発行しているが、2006年度春学期7名、2006年度秋学期6名、2007年度春学期は10名の学生が修了している。これが多いのか少ないのかは、要求される内容との関わりがあるので評価は難しい。英語インテンシブ・プログラムを履修するためには、TOEFL-ITPの受験が義務づけられており、本センターでは毎年、6月と12月にTOEFL-ITPのテストを実施している。このテストで500点以上取得したことのある学生数は2007年10月現在で344人いる。また「英語コミュニケーション文化」副専攻(MDS)の履修条件では、TOEFL500点以上を取得していることが求められるプログラムであり、申込者は2003年度秋学期の21名をピークにその後、1桁台の人数で推移していたが、2007年度秋学期は15名に回復している。またMDSの修了者は、合格者数の少なさを反映して2005年度6名、2006年度1名となっている。2007年度以降は履修者が増加する傾向が予想されるので増加が期待される。現状では、センターの提供科目であっても各学部のカリキュラム権があり、センターの目標が本学全体としての目標として各学部の言語教育に浸透できるシステムになっていない。この目標を具体的に推進することは全学の仕組みの改革が必要であると思われる。

学内第三者評価

「『英語の関学』の復活を目指して、1992年に設立された言語教育研究センターは、英語教育の一層の充実のみならず英語以外の言語教育を含めた本学の多様な言語の教育と研究を推進することを使命とする」とされているなど、そのミッションは明確である。進捗状況報告では、現在書かれている内容に加えて、センターとして掲げている人材育成の目標がどの程度達成されているかについての検証の記述を加えることが、自己点検・評価の趣旨に照らして望ましいと思われる。